

食卓の主

マルコによる福音書 14 章 22～26 節

ここに一冊の式文があります。ハガダーと呼ばれるもので、2010 年にはじめて出版されたユダヤ教の過越祭の礼拝の順序をしるした式文です。過越祭はユダヤでは 7 日間にわたるお祭りですが、外国に居住するユダヤ人は二日間で祝います。これは日本に居住するユダヤ人と日本人のために出版されました。この式文は、過越祭のなかで一番重要な過越の食事の式次第、ようするにプログラムですね。旧約聖書出エジプト記 12 章以下に従って、この時、食べるものは指定されており、後の時代にこれをどのように調達し、どのような仕方で食べるかということまでラビによって整えられ、さらにそれぞれの行為の前に、その来歴や意義を明らかにする聖書箇所が用いられたり、詩篇や讚美歌が歌われたりします。このハガダーは、過越祭の礼拝順序とも書いてありますから、特別な儀式的な食事をともなう礼拝、つまり、わたしたちでいう聖餐式をともなう礼拝にあたると言ってもよいかもかもしれません。というか今日のテキストを読んでも分かりますように、この過越しの食卓から主の晩餐、現在の聖餐式が生まれたのです。この本に載せられている解説によりますと、現在の形にまとめられたハガダーが初めて登場するのは 1482 年スペインで印刷されたもので、残念ながらこれは現物が残っていないそうです。現存する最古のものは 1526 年チェコのプラハで印刷されたもので、以来、世界に散ったユダヤ人のために各国版のハガダーが作られ、用いられてきました。紀元前 1300 年頃に起きた出エジプトの救いの記憶に遡る過越祭、そしてその中心にある過越しの食事は、初めの恵みに立ち帰り、救いの記憶を追体験することで、神の民イスラエル

を形作り続けてきました。ちなみに、この過越しの食事の礼拝式次第が「ハガダー」と呼ばれるのはヘブライ語の「語ること」から来ています。彼らは食卓で、主の恵みを「語る」のです。神が、自分たちをエジプトでファラオに奴隷として苦しめられた生活から解放するために何をしてくださったか、そのために何が必要であったかを繰り返し語り、思い起こし、感謝の念をあらたにし、神の民として自由を与えられたことを喜ぶ。それを語り継ぎ、賛美し、世代を超えてともに分かち合うことに「ハガダー」の意義があるのです。

制限された説教時間の中で少々くわしく過越しの食事の式文ハガダーを紹介したのは、この過越しの食事の持っている意義と役割について知ることで、さらにキリスト教において、今日のテキストに記されている主の晩餐が、聖餐式として祝われることの意味を捉えたかったからです。連続しているところと連続していないところ、イエスさまが成し遂げて下さったこととは何であるかをここから見て取りたいのです。連続しているのは命がささげられ、それを記念することです。紀元一世紀のユダヤ人の歴史家ヨセフスは300万人がエルサレムで過越し祭を祝ったという記述を残しています。巡礼で多くの人たちが集まるとはいえ、イエスさまが生きた時代にそれほどの規模で過越し祭が祝われていたことに驚かされます。ところで過越しの食事は家族単位で持たれるのがルールです。イスラエルでは当時最低10人が家族の単位とされますので世帯数でいうと最大30万世帯くらいでしょうか。これが世帯ごとに、いけにえの1歳の雄の「小羊ないし子ヤギを準備したと考えますと最大で30万匹相当の家畜が必要とされた計算ですね。まあ、出エジプト記には家族が少なくて準備できない場合は他の家族に合流することも認められていましたから30万匹というのは多すぎかもしれませんが、半数としても15万匹程度の家畜が屠られたこ

とは間違いなさそうです。そうしますとこうした習慣がイエスさまの時代まで 1300 年間続けられてきたことになります。一体、その間に屠られてきた過越しの小羊はどれくらいの数に上るのでしょうか。こうした動物犠牲のうえに、神の民であることが整えられてきた歴史があることを知っておくことは重要です。あわせてもうひとつ数のことで参考になりそうなことをあげておきますと、マルコによる福音書 5 章にゲラサの悪霊付きの話がありましたね。レギオンとなのる悪霊に憑りつかれて物も言えず、自傷行為を繰り返し、墓場に住んでいた男です。この男を苦しめていた悪霊たちはイエスさまの許可を得て、その地方で飼われていた豚のむれのなかに入った結果、2000 匹以上の豚が崖から雪崩をうって湖に飛び込み、溺死したという出来事がありました。悪霊に憑りつかれた一人の男が正気に戻って社会復帰するために豚二千頭の犠牲が必要になったのを見たゲラサの人々は、主イエスにその地方から出て行ってもらうように願ったというエピソードです。こういう出来事を思い起こしますと、過越しの犠牲の小羊の膨大な数ばかり、この二千匹の豚の犠牲ばかり、積み上げられた動物の命を思いますと、では一体、ひとりふたりのレベルではなく、神に背き、神さまとの交わりの断たれてしまっている人類全体の罪を贖うためには一体どれほど巨大な犠牲が必要であったのか、それはもう天文学的なというか、数をあげることなど出来ない規模の犠牲が必要であったと考えねばならないでしょう。何よりも羊やヤギや豚といった物言わぬ家畜ではなく、さらによりまさった犠牲でなければ、人の背きの罪を拭い去り、人自身が贖われた命を感謝して生き方の向きを変えてゆくような出来事は有り得なかったことも分かるのではないのでしょうか。こうして、神さまご自身がよしとして下さった神の愛する独り子イエスの十字架の死しか人類を救うすべはなかったという道筋が見えてくるのではな

いでしょうか。この時、いかに尊い捧げものがなされたかということについて、わたしたちは心を鈍くしてはならないと思うのです。食卓は、わたしたちが生きるために、命をつなぐために絶対に欠くことのできない場所です。一日に三度、あるいは二度かもしれませんが、ともに集まり、食事をする場、その場がたんに生物として活動に必要なわたしたちのエネルギー摂取の役割ではなく、神さまに呼びかけられて生きる人間本来の姿を取り戻すための心と魂を含むまったき存在の刷新の場として、罪赦されて主とともに生きる新しい人間の誕生の場となるように、キリストは、その食卓の場をご自身の命による祝いと記念の食卓に変えられた。ここに主の晩餐の尊い、まことに有り難い意味があります。主は次のように弟子たちを招かれました。「取りなさい。これはわたしの体である」そして、杯を感謝の祈りをささげて後、弟子たちに渡し「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」。そう語りました。わたしたちも聖餐式のときにこの主の招きの言葉を繰り返し聞いております。ここで主イエスがご自分の死を契約と結びつけられたことを最後に語っておかねばなりません。わたしたちが神さまから頂いている聖書、新約聖書、旧約聖書はそれぞれ New Testament、Old Testament であり、この二冊があわさったものがバイブルとなっています。この Testament とは契約であり、遺言とも訳されるものです。過越しの食卓は、主の晩餐となり、主イエス・キリストによる遺言、そして、それはわたしたちに与えられた新しい契約となりました。それは主イエスご自身の命によって書き換えられた契約です。ちなみに旧約聖書にもいくつもの契約が記されていますが、もっとも古い契約は創世記 9 章に出てきます。この個所は過越しの小羊や、主イエスの十字架の死を理解する助けにもなりますから、少し長いですが 9 章 1 節から 11 節までを朗読します (11 頁)。

このあと契約のしるしとして雲の中に虹をおくという美しい表現が出てくるのですが、ここで心に留めねばならないのは11節で「わたしがあなたがたと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない」という、神さまご自身の約束、契約です。ノアの洪水のあとに結ばれた契約は、「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼い時から悪いのだ。わたしは、このたびしたように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい」という神の決意にもとづいています。しかし、ならば、その後も続いた人間の背き、被造世界にもたらされる混乱と破壊を、神はどうすればよかったのでしょうか。ある意味、洪水という、お造りになったものをひとたび洪水によって葬り去るという手段を禁じ手とし、もう二度とこのようには行わないと誓われた後、人間の背きに対処するすべは過越しの動物犠牲で果たされることはなく、ついに神の独り子が飼葉おけに下り、人となって誘惑と戦いつつ、神に従う従順をつらぬき、ついにはわたしたちの背きの罪を背負って十字架で死なれる苦難のメシアとしての働きによって契約そのものが新たにされる。わたしたち人間を滅ぼさず、同時に、神さまご自身の義しさをつらぬかれる道は、ご自身の愛する独り子イエスを十字架で砕く以外になかったのであります。ここに愛があり、その恵みの出来事を心に刻むために、命をつなぐ食卓を、イエスさまは救い主としてわたしたちをお招きになり、ご自身につなぎ、神の子として新たにされる恵みの食卓に変えて下さった。この夜の出来事が人類の歴史を新しくすることになったのです。主イエス・キリストの恵み深さと、神の愛を感謝をもって受け止め、そこから始まる新しい歩みへ送り出されたく願います。

お祈りいたします。